
石 川 滋

『経済発展における技術、雇用、
制度についての論文集』

Shigeru Ishikawa, *Essays on Technology, Employment and Institutions in Economic Development: Comparative Asian Experience*, Kinokuniya Company Ltd. Tokyo, 1981, xxii+466 pp.

1

アジア地域に位置しているある特定の開発途上地域の

経済発展過程を研究するという事は、本質的に学際的な作業とならざるをえない。それが経済発展を対象とする以上、資源配分の種々のメカニズムの効率性を比較研究している経済理論に精通していることが必須の条件であることはいうまでもなからう。研究対象がある特定の地域の個性ある歴史過程の一部分である以上、われわれはその個性ある歴史を深く理解していこうとする意味で歴史家でなければならない。対象地域での経済組織のあり様を間違いなく理解するためにはその社会で歴史的に形成・維持されてきている人間関係を律するルールとしての社会秩序を内在的に理解しておくことが不可欠であるが、この面ではわれわれは社会学者・人類学者でもなければならない。またアジア地域の開発途上国の産業の中心は農業であることが多いが、農業という産業活動のあり方を理解するためには地形・気候・植生といった自然環境についても深い理解を持つ必要がある。つまり自然科学者でもなければならない。アジアのにおいのする経済発展論を書きあげるといふことは、このような学際的作業をふまえてはじめて可能となるのである。

しかしながらここで強調しておくべきは、諸領域に關しての知識を出来るかぎり豊かにしていただくだけでは不十分であるという点である。豊かに蓄積した知識を、われわれの研究課題にそくしてたくみに位置づけ体系化していくという緊張をはらんだ作業こそが最も重要なのである。経済研究という分野にひきつけてこの作業を性格づけてみると、それはわれわれが手中にしている経済理論というものを歴史学・社会学・人類学そして自然科学との関係の場の中で相対化させていく努力ということになる。

さて、「経済発展における技術、雇用、制度についての論文集」というタイトルを持つ本書において石川教授は、経済分析の慣例では経済外的与件とされて直接的な研究対象とされるのが必ずしも多くなかった「技術」と「非市場的制度」という問題点を正面からとりあげて、それらがアジア諸国の経済発展という歴史過程の中でいかなる役割をはたしているかをさぐり出そうとされている。とりあげられている研究対象は技術の面では、灌漑・機械化・多毛作化をふくんだ農業技術(第1章)と製造業での先進経済からの移転技術の修正過程(第4章)とである。また制度の面では、インド村落におけるジャジュマニ制とか旧中国の宗族を中心にした村落構造とか、地域によって多様なあり方が示される非市場的コミュニティ構造そのものと、市場経済の浸透にともなっているコミュニティ構造の変質にみられる多様性が論じられて

いる(第3章)。さらに農業生産技術の変化が農村社会構造にどういふ変化を与えてきているかを論じる(第2章)ことで、技術と制度との相互関係をも明らかにされようとしているのである。

アジア地域の多様な場所・時代にみられる技術とか非市場的制度とかをこのように正面から論じるためには、農業技術そのものについての知識からアジア各国の歴史についての知識にいたる幅広い学際的な知識の蓄積が前提にならざるをえないことはいうまでもなからう。ところで石川教授は御自身が本書で採用された方法に関して、「経験的に(empirically)つかまえた問題点から出発するという基本的に帰納的な接近方法」(preface, p. ii)をとったと書きしるされている。「問題点を経験的につかまえる」とさりげなく表現されている作業の背景に、長年にわたってのおどろくべき広さをもった知識の蓄積努力が横たわっている事態を見落すべきではない。これに続けて教授は、「主として経験的につかまえた問題点を処理していくための研究の枠組を作りあげる手段として、理論を用いた」(preface, p. ii)と書かれている。この「理論」というのは経済理論のことであろうが、この文章の含意は既成の経済理論を出発点あるいは前提として物を見ていくといったことは行わなかったということであろう。つまり、豊かに蓄積された学際的な知識をアジア諸国の経済発展過程の深い理解を得るといふ課題にてらして、たくみに位置づけ体系化していく作業の中で、既存の経済理論の有効性あるいは有意性を確かめていったといったことであろう。既存の経済理論に精通してはじめて可能となる作業であろう。本書は全体として、本質的に学際的な作業であるアジア経済発展論の書き方のひとつの手本となっているといえよう。

2

本書のもうひとつの方法は、「経済発展の比較」(preface, p. ii)というものである。本書はこの方法を通じて非常に明瞭に、アジア諸国の経済発展というひとつの歴史過程を、各国のもつ特殊性だけを強調していく極端とどの国も同一の発展過程をたどるといふ普遍性だけを強調する極端とのいづれにもおち入らずに、本当に有効に分析していく視点・方法がいかなるものでありうるかを語ってくれている。評者はこの点こそが本書の最も重要な結論であると考えたい。そこでこの重要な結論をさらに深めていくためにどういふ論点をもっと詳細に展開していく必要があるかを、本書の内容にそくして少々考えておきたい。

最初は耕地面積当り生産性上昇という農業成長の過程

において、日本の歴史的経験と東南・南アジアの現状との間では面積当りの労働吸収力の水準に非常に大きい格差がみられるという問題である(第1章)。東南・南アジアの労働吸収力の水準は日本の経験にくらべて相当に低いだけでなく、農業成長過程の中でこの水準が上昇しているという動きも必ずしも明瞭ではないのである。このような差の発生理由に関して石川教授は、日本の高い労働吸収力を支えたのは灌漑農業の発達と多毛作化の進展であったが、これらの条件を欠く東南・南アジアでは労働吸収力が低いという分析を示されている。さらに現代の東南・南アジアにとって収量を増大させる技術の中では先進国で開発された労働節約型のものが費用面で安くつくといったことがあるために労働吸収力の増大は困難であろうとの認識(preface, p. iii)も示されているのである。

さて評者は、このような差を説明しきるためには石川教授のこの説明をこえてさらに、次の2点に関しての検討が不可欠であろうと考えている。第1は労働吸収力に対する農村構造あるいは農業経営形態の影響である。Appendix 3A のモデル分析が示唆してくれているように、農業の労働吸収力は市場原理だけで秩序づけられた農村におけるよりも patron-client 型の内部秩序をもつ農村においてより大きいのではなからうか。あるいは、家族労働の自己評価と市場賃金との乖離をとく農家主体均衡論が示唆してくれているように、家族経営の労働吸収力の方が資本家的経営のそれより大きいといえるのではなからうか。理論的・実証的につめられるべき重要な課題である。第2は自然環境の問題である。農業生産のあり方というものはその地域の自然環境への適応として形成されるものであろう。日本の灌漑稲作は扇状地という環境での分水を基本とした水利用の体系として形成されてきたものであるが、例えばタイの稲作は農民の力だけでは制御不可能なデルタという環境への適応として発展してきている。デルタを特徴づける洪水への適応としてのこの稲作においては、灌排水のための労働も不要であるしまた深水栽培の故に除草労働の必要もないのであ

る。自然環境の違いをぬきにして、農業の労働吸収力の差を論じることは出来ないのではなからうか。

次は市場経済の浸透に先立って歴史的に形成されてきていた非市場的コミュニティの内部構造にみられる多様性という問題である(第3章)。日本においては、本家一分家というヒエラルキー的秩序と結にみられる相互扶助秩序とが併存していたが、旧中国においては同一宗族内の諸家族の相互扶助にみられる平等原理が支配的であったとされている。またインドにおいては、ジャジュマニ制というヒエラルキー的秩序が支配的であったとされている訳である。そしてさらに重要な事実として市場経済の浸透にともなうこれらの非市場的コミュニティの内部変化はこれまた多様であったという点が強調されているのである。この変化の多様性について紹介する紙幅がないのは残念であるが、評者はアジアのにおいのする経済発展論を書きあげるためには非市場的コミュニティの内在的理解が不可欠であると確信しているので本書での仕事を貴重なものとして受けとめておきたい。

石川教授は何故非市場的コミュニティにこのような多様性がみられるかについては、それらが歴史的に形成されてきたものであるという説明を与えられているだけである。石川教授の学問的慎重さをこの辺に感じるのであるが、評者としては「歴史的に形成されてきた」というその中味にさらに入り込んでいきたいのである。何らかの社会科学的仮説をもって非市場的コミュニティ構造に何故このような多様性が発生してきたかという事自体をさぐっていきたいのである。そのような仮説は、非市場的コミュニティがその社会なりの目的にそって稀少資源を最適に配分する経済制度であったという事をもとめた上で、人口/土地比率に代表される資源賦存状態の経済分析と親族形成原理に代表されるその地域の文化の内在的理解とをふまえることによってなんとか形づけることができるのではなからうか。

とに角、本書を前提としてアジア経済の勉強をすすめることが出来るわれわれの世代は幸福である。

〔原 洋之介〕